

新今宮駅設置

これはいずれも他区に存していたところ、三七年一〇月天王寺駅と今宮駅の間に新今宮駅の着工を  
み、三九年三月二日工費一億五、〇〇〇万円で完成、当区もその恩恵をうけるに至った。現在では  
環状線のみが発着であるが、近い将来複々線となり関西線とともに発着を行うこととなり、南海本線  
との接続についてもすでに完成している。

新今宮駅利用乗客調(四一年五月、一日平均)

定期外	定期	計
乗車人員 八、五七二	四、九二四	一三、四九六
降車人員 九、一二二	四、九三四	一四、〇四六

# 第六章 教育

## 一 小学校

当区小学校  
開設年月

当区における小学校は現在一四校(あいりん小学校および区外の金塚小学校を除く)を数えているが、小  
学教育は明治五年の学制発布以来極めて古い沿革がある。いま各校を創立年の順序にあげると

校名	創立年月日	当初の名称
玉出	明治六年二月二五日	第六大区二小区第三番小学校
津守	八年一〇月一五日	第六大区一小区第八番小学校
弘治	三一年七月一五日	今宮尋常小学校
岸里	大正二年一〇月三二日	玉出第二尋常小学校
長橋	四年四月一五日	今宮第二尋常高等小学校
萩之茶屋	六年六月一五日	今宮第三尋常小学校
千本	九年九月一日	玉出第三尋常高等小学校
天下茶屋	一〇年一月八日	天王寺第四尋常小学校
今宮	一〇年三月一〇日	今宮第四尋常高等小学校

南 津 守	大正二年 五月一日	津守尋常高等小学校分教場
橘	一年 三月二日	今宮第五尋常小学校
(金 塚)	二年 三月三日	天王寺第五尋常小学校
南 津 守	四年 四月一日	津守第三尋常小学校
松 之 宮	昭和二年 四月一日	今宮第六尋常小学校
開	五年 五月二〇日	今宮第七尋常小学校
梅 南	三年 四月一日	梅南尋常小学校
浜田国民学校	一六年一月一〇日	高等科のみの単独校、昭和三年四月一日休校処分
あいりん小・中学校	三八年 四月一日	昭和三七年二月一日救之茶屋小学校分校として設置

備考 創立年月日は各校の創立記念日とは若干相違している。

右の表によると区内の小学校としては、玉出校がもっとも古い。これは西成区内でも最初のものであった。本地区内では学制発布前、沢田栄司、豊川永次郎の二つの寺小屋が存し、習字、算術等が教授されていたが、学制公布とともに村内の長源寺を校舎として、第六大区一小区第三番小学校としてその開校をみ、遠藤十郎および上記の二名がその教育にあたった。そして九年七月新校舎竣工し校名を第六大区一小区第三番勝間小学校と称したが、一二年三月西成郡大江小学校、二〇年四月西成郡玉津簡易小学校、三四年四月西成郡玉津尋常高等小学校などと改称、四一年三月はじめて玉出尋常高等小学校となった。

### 津守校の沿革

他方津守新田では、八年一〇月一五日村内の東島に第六大区一小区第八番小学校を開設したが、当時は小学校は上等、下等に分れ各等それぞれ八級とし、毎級の修業期間六ヵ月、各四年をもって卒業とされていた。しかし当時上等小学は一小区一校であったため同校では下等小学科のみであった。かくて一二年三月番組廃止とともに、はじめて津守小学と改称したが、一七年六月津守新田が勝間村とともに第二戸長役場の管理区域となったため、同校は廃され玉津小学校の分校となった。ところが二年町村制の実施で、津守新田は川南村に属したため、校名は川南村津守簡易小学校と改称され、二六年一月に至って津守尋常小学校、大正七年四月津守尋常高等小学校となった。

### 弘治校の沿革

今宮村は明治三〇年四月大阪市の第一次市域拡張で、関西本線より北側が大阪市部となったため、それまでにあった小学校も市内に入り、ここに新たに独立小学校を設置する要があった。すなわちそれまでの小学校は明治六年三月一二日第六大区一小区第一番小学校として、今宮村六番地戸長役場楼上を仮教室として開設をみていた。そして翌年三一六番の二に新校舎を設立、校名も今宮尋常小学校、今宮尋常高等小学校と改称していたが、前記の市部編入によって、新たに成立の今宮村では、取あえずもとの恵美須・木津の両尋常高等小学校に委託した。そして三一年七月一五日一まず同村三日路六五五番地の建家を借家して仮校舎とし、児童六七名を単級編制として授業開始し、三四年一二月同村字花園四・五七番地および四七五番地を新校舎の位置としたが、戦争勃発等のため遅れ、漸く三九年一二月新校舎に移転した。かくて四四年四月高等科を併置、今宮尋常高等小学校と改称するに至っ

た。

備考 参考のため小区時代一小区における校名をしるすと、一番小学校今宮村、二番小学校今在家村、三番小学校勝間村、四番小学校中在家村、五番小学校木津村、六番小学校難波村、七番小学校吉右衛門肝煎地、八番小学校津守新田であった。

大正期の  
相づく開校

このように勝間・津守・今宮の各村の母体となった三校は、大正期に入るとともに、村勢の急激な伸長とともに児童が激増し、つきつきと新設校の設立をみるに至った。まず勝間村（大正四年一月玉出町と改称）では、大正二年一〇月新たに第二尋常小学校、同九年九月第三尋常小学校を設置し、今宮村（大正六年九月町制施行）では四年四月今宮第二、六年八月今宮第三、一〇年四月今宮第四、一一年三月今宮第五とつきつきと増設、津守村でも一一年四月津守第二、一四年四月津守第三と設置され、その増加振りはまさに驚異のものがあつた。

しかしこうした教育施設の拡充は村の財政に深刻な影響を与えたことは、まさに今日の想像を越えるもので、当時玉出尋常高等小学校費義捐歎願書の如きをもよく推察することができる。

教育費の増  
大

玉出尋常高等小学校費義捐の義に付歎願

「……実に本村は古来大阪市殷富の犠牲となり村財政窮乏の中に碌々として今日に至り候。然るに世の進歩に伴ひ諸般の村政年と共に拡大し本年度経費は合計老万六千余円を算し、就中教育費は其の半以上を占め居り候方今教育の隆盛なる都邑到る処学校の設あらざるなく文字なきもの殆んど跡を絶たんとす。本村民に於ても子弟教育の必要なるを認め学童は之を全部就学せしめ教育状態は之れを他町村に比して遜色なからんことを期し居り候。

翻つて本村小学校を見るに元会所を造作応用し逐次増築したりと雖も、其の建築法は迥も今日の理想に叶はず、狭隘粗雑風に毀み雨に損し真に見るに耐へざる有様を有之候。元より華美を好むにあらざるも学童の危険を黙過し難き時、文部省は本年より大に学政を振張して義務教育年限を六年に定められたれば、俄かに増加せし学童を此の校舍に収容し難く、時年諸君の寄附を仰ぎ校舍の新築を企て多数の賛成を得しも時日遷延の恐れありしを以て、急いで其計画を變更し村債を起し以て一時を救ひ、幸ひ本年四月より新舎に移り教授を開始せしも内部諸器具器械並教育用図書に至りては一つとして備はるものなく、此等の経費予算尚一万円に達し候。此れ微力なる村民の到底耐へ難き処に有之、敢て本村出身諸君の義捐を募り、村教育事業の完成を俟たんとし、其多少に不拘御寄附被下候はゞ之れに過ぎず候。茲に有志一同連署し嘆願候也。

明治四十一年十一月一日

村 会 議 員 一 同  
村 長・助 役・収 入 役

このような教育費の年を追うての累増は、今宮、津守の両村状況も同様であつたが、今宮で注意される点は、明治四〇年頃貧困児童で昼間就学不能者のため簡易就学制を設け、あるいは幼年職工のため夜学の制を設け、今宮第一の教員が出張教授した。これはのち今宮第三での夜間尋常小学校（大正八年五月開始）と発展したが、不就学児童問額は同校下では最大の悩みであつた。また今宮第二では大正一三年四月から大阪府社会課の囑託により鮮人教育を開始し、夜学一学校を置いて同校訓導二名、鮮人教師一名がその任にあつた。

夜学校と鮮  
人教育

風水害による校舎倒壊

かくて大正一四年四月大阪市への編入によって各校は市立となったが、昭和期となって旧今宮町域に、二年四月今宮第六、五年五月今宮第七、同一三年四月梅南尋常小学校の設立をみ、本区内に現行のように一四校（大正一〇年設立の天王寺第四を含む）全部の開校をみた。この間昭和九年九月の風水害で全市校園施設に甚大な被害があったが、当時本区内の学校被害はつぎの通りであった。

災害程度	校名	倒壊建物	職員・児童死傷者
全壊	天王寺第四	木造校舎一棟	—
同	津守第三	同	児童重軽傷者一
半壊	今宮第二	同	—
同	津守第二	同	職員死亡一
大破	今宮第一	同	—
同	同第三	同	—
同	同第四	同	—
同	同第五	同	—
同	同第六	同	—
同	玉出第一	同	—
同	同第二	同	—
同	同第三	同	職員重傷者三 児童死亡九 重軽傷八四
同	津守第一	同	—

国民学校と校名改称

また昭和一六年四月明治初期以来の小学校の名を改めてドイツのフォルクス・シューレを見習い国民学校と改称したが、この機に設立番号による校名を改め、今宮第一を弘治、今宮第二を長橋、今宮第三を萩之茶屋、今宮第四を今宮、今宮第五を橋、今宮第六を松之宮、玉出第一を玉出、玉出第二を岸里、玉出第三を千本、津守第一を津守、津守第二を南津守、津守第三を北津守各国民学校と改称した。なお天王寺第四の天下茶屋、天王寺第五の金塚小学校への校名改称は大正一四年四月大阪市への天王寺村編入の際行なわれていた。

学童疎開

かかる国民学校の設置とともに教育は時局の進展につれますます国防教育に進展したが、太平洋戦争末期には遂に学童疎開が起り、残存校舎も空襲により多数被災することとなった。まず前者については、一九年八月末から九月にかけ全市約六万七千名の学童を二府一〇県に分散実施された第一次疎開にはじまった。そして同年十一月約七千五百名の第二次疎開、二〇年一月の新三年生を含む四万名の第三次疎開および六年生の引揚、および四月の再疎開など数次にわたり実施をみたが、二〇年七月末現在においての本区内での実施状況はつぎの通りであった。

校数	学童数		派遣 教員数	寮母作 業員数	一カ月 以上罹病者数	死亡数
	一・二年	三・六年				
一六	一一二	二四五	二、五九二	二、八三六	一五三	三三八
全市 二六六	一、五六二	四、二八九	四三、〇二七	四七、三二六	二、七八三	五、二二一
						一六九
						七

各校疎開状況

校名	疎開年月	疎開先
弘治	一九一九年九月一日—二〇〇一年一月三〇日	泉南郡熊取村ほか三カ村
長橋	一九一九年九月七日—二〇〇一年一月二日 二〇〇一年五月三日	泉南郡孝子・淡輪・下荘・西鳥取四カ村 (二六六名) 島根県飯石郡来島村(一三六名)
萩之茶屋	一九一九年九月—二〇〇一年一月	泉南郡樽井村・西鳥取村
今宮	一九一九年九月七日 二〇〇一年三月二十五日 (第二次)	泉南郡尾崎町・東鳥取村
橘	一九一九年九月一八日 一九一九年二月六日 (第二次)	和歌山県海草郡紀井・川永・山口村
松之宮	一九一九年九月八日—二〇〇一年一月三日	和歌山県有田郡箕島町
梅南	一九一九年九月九日—二〇〇一年一月十七日	和歌山市紀三井寺・海草郡和佐村・西和佐村
玉出	一九一九年九月八日 二〇〇一年四月二日 (第二次)	和歌山県有田郡湯浅町・田殿村・広村
岸里	一九一九年九月九日 二〇〇一年八月五日・六日 二〇〇一年一月二十五日	和歌山県海南市 滋賀県佐山村に再疎開
千本	一九一九年九月九日 二〇〇一年四月二日 (第二次)	和歌山県海草郡巽村・亀川村・安原村
津守	一九一九年八月七日—二〇〇一年一月二十六日	和歌山県海草郡加太町 滋賀県甲賀郡伴谷村・畑村に再疎開
南津守	一九一九年九月九日 二〇〇一年二月六日 (第二次)	和歌山県海草郡有功村
北津守	一九一九年九月七日—二〇〇一年一月二〇日	大阪府貝塚市
天下茶屋	一九一九年九月—二〇〇一年一月	和歌山県有田郡御震村・石垣村・島屋城村
金塚	一九一九年八月二八日 一九一九年二月六日 (第二次)	和歌山県那賀郡東野上町・中野上町・村野上村

戦災とその影響

つぎに戦災については殆んど各校が二〇〇一年三月、六月の空襲で、大なり小なり被災したが、本区内で同二一年三月休校措置をとられた学校は、徳風(昭和十三年一月浪速区より当甲岸町二番地に移転開の二校にとどまった。戦災前鉄筋校舎をもつ学校としては、弘治校(二一年二月落成)、長橋校、(二四年六月)今宮(二三年四月講堂のみ)、橘校(二部)、岸里校(八年一月)、千本校(二一年一月)、北津守校(二四年)、天下茶屋校(二二年九月)等で、それも弘治校のほかは一部建物のみ鉄筋校舎に改築されたのみであったため、木造校舎を失う例が多かった。しかし戦後一、二年は疎開その他で児童数も減少していたが、やがて市勢復興に伴うてはげしい児童数激増の追及にあって各校とも老朽校舎の復旧・増築、二部教授の問題に常に悩まされた。

新教育の実施

殊に二二年には画期的学制の六・三・三制が実施され、旧教育から新教育への転換があり、二三年

各校充実状

一月には教育委員会の設置、従来の保護者会からP・T・Aの発足、教育委員会西成事務局の設立（二八年八月限り廃止）と新しい教育確立樹立は教育界はまことに目まぐるしい活動をつづけた。いま現一四校の概況を示すとつぎの通りである。

校名	位置	敷地	建物	戦後の主な施設、行事
弘治	花園町八	平方メートル 五、四六四	平方メートル 一、九〇五	二五年七月一日創立五〇周年記念式挙行、三二年六月講堂上教室増築
長橋	鶴北四丁目四	七、五六四	一、九五六	二一年三月開国民学校休校により同区域統合、二五、二九、三三の各年戦災教室復旧並びに増築、三八年プール竣工
萩之茶屋	甲岸町二	六、六五二	二、五〇五	二九年鉄筋三階建九教室竣工、三二年プール完成、三七年講堂落成
今宮	三日路町一五	五、四五四	一、七三四	二七年八月鉄筋三階建第一期工事、二九年一月同第二期、三〇年一月同第三期工事、三二年九月同第四期工事落成
橋	橋通五の六	四、三六九	一、四四七	三一年八月、三二年二月、三四年一月鉄筋校舎落成、三九年一月プール竣工
松之宮	旭北通七	四、九一九	延四、三五七	二五年九月ジェーン台風により校舎大破三〇年一月、三二年四月、三四年二月三五年五月四期にわたり鉄筋校舎落成
梅南	梅南通六の一	七、六五三	延三、六三八	三三年二月、三四年四月鉄筋校舎落成、三九年五月講堂竣工
玉出	姫松通二の一七	七、二五〇	一、七二九	三〇年一月、三一年五月、三四年三月鉄筋校舎落成
岸里	新開通一の一九	一、三〇〇	二、二五〇	三一年九月、三三年一月、鉄筋校舎落成、三八年一月創立五〇周年記念式挙行
千本	千本通六の二〇	八、一三九	延五、二七七	三六年九月第二室戸台風にて講堂、二階教室大破、三八年二月鉄筋二階建講堂・教室復旧
津守	津守町東五の二二	二、五二三	延四、一六九	二七年一月新校地として白山邸跡敷地に移転決定、三三年三月鉄筋校舎、三四年五月鉄筋講堂落成
南津守	津守町東八の四一	七、七七〇	一、七五四	三五年一月鉄筋校舎竣工、三八年七月プール落成
北津守	津守町東三の八四	七、一八〇	延二、三六二	二五年九月ジェーン台風のため校舎大障害、三四年三月鉄筋校舎落成
天下茶屋	聖天下一の六七	七、一四五	延四、九八三	三〇年鉄筋校舎落成、三八年二月プール竣工
金塚	阿倍野区旭町三の八八	九、四三一	二、五八〇	二七年一月、二九年一月、三一年四月、三三年二月の四期にわたり鉄筋校舎落成

### 二 新制中学

新制中学はその名の示す通り、六・三・三制の教育制度の改革によって二二年四月一日をもって生れたが、当初の二二年度は全市で五二校発足した。当時国民学校高等科・青年学校・中等学校よりの切替えについては、つぎの方針によって構成せられた。

二年三月 国民学校初等科修了者は 新制中学一年へ入学  
 " 同 高等科一年修了者は 新制中学二年へ編入  
 " 同 高等科二年修了者中希望者は 新制中学三年へ編入  
 " 青年学校第一部(全日制)一、二年修了者は 新制中学二、三年へ編入  
 " 青年学校第二部(定時制)普通科一、二年修了者は 新制中学二、三年へ編入  
 " 青年学校第二部(定時制)本科修了者は 新制中学三年へ編入  
 かくて本区においてもつぎの三校が設立されたが、設立当初は殆んどが小学校舎を利用せざるを得ず、独立校舎を得るまでには、また少なからず苦難な道を歩んだ。

西成第一中学校 柳通二の一——旧市立浜田国民学校々舎設備を引つぐ。  
 (二十四年五月天下茶屋中学校と改称)

西成第二中学校 花園町弘治小学校内市立弘治商工学校並びに弘治実科女学校を切換え発足、また今宮小学校内に四学校の分校開設、二十四年七月新校舎落成式挙行  
 (二十四年六月今宮中学校と改称)

西成第三中学校 本校を津守小学校内に、分校を南津守小学校内に併設し開校  
 (二十四年五月成南中学校と改称)

二年六月新開通二丁目現在地に本校移転  
 二年六月新開通二丁目玉出分校設置し宮下分校廃止  
 二年四月玉出分校独立し西成第五中学校となる

右の三校について、二三年四月第四中学、二八年四月第五中学がそれぞれ開校した。

西成第四中学校 二三年四月津守小学校内仮校舎にて開校

(二十四年五月鶴見橋中学校と改称) 二三年六月現在地に移転、二四年四月津守小学校内に分教場開設、二八年九月同分教場廃止

西成第五中学校 二八年四月成南中学分校独立して開校

(二八年六月玉出中学校と改称)

阿倍野第四中学校 二二年四月金塚小学校内に開校

(二十四年五月一日松虫中学校と改称) 二四年七月松虫通三の三六現校舎に新築移転

このようにして本区内では五中学および金塚小学校山王地区を含む松虫中学およびあいりん中学を有するに至ったが、校地決定の後には、鉄筋校舎の建設、講堂あるいは体育館、プール、図書館、特別教室など殆んど連続工事を実施せざるを得ない状況であったが、各校P・T・Aの多大の援助を得て、今日の充実さを示すに至った。

各校充実状況

校名	所在地	敷地	建物	主な工事
天下茶屋	柳通二の一	一、〇五一	四、〇二二	二九年より三七年まで六期にわたり工事に総合工作室落成
今宮	東四条二の二八	一九、五〇一	七、〇三四	二四年、二八年、三四年、三五年、三六年校舎落成、三二年プール、三五年産業教室、三八年体育館講堂落成 (なお三三年五月南校舎一〇教室) (放火により焼失)

成 南 新開通二の二〇 一四、七九七 五、八二六

二九年六月、三三年一月鉄筋校舎竣工、三三年工業教室、三六年理科教室落成

鶴 見 橋 長橋通九の九 一三、七九一 二、九二七

二三年、二八年、三一年、三三年、三五年、三七年校舎落成、三四年工作室落成（なお二五年一月南棟五教室原因不明の出火で焼失）

玉 出 玉出新町通五の三 七、六七二 三、一二五

二八年、二九年、三五年校舎落成、三七年講堂兼体育館、三八年機械工作室落成

松 虫 阿倍野区松虫通三の三六 一一、六八八 二、六三四

二九年七月、三〇年八月校舎落成、三七年講堂兼体育館、プール、三八年四月特別教室竣工

### 三 府 立 高 校

本区児童の進学する府立高校は今宮高校・阿倍野高校・住吉高校の三校があるが、いずれも隣区浪速・阿倍野に存し当区内には存在していない。しかし大正五年四月より府立今宮工業高等学校が西四条二丁目の地に開設され、すでに五〇有余年、卒業生総数一万数千名を世に送り、わが国産業発展の原動力として社会に貢献し来っている。

本校の沿革に関しては、その当初大正三年四月一日当時の今宮村の現在地に府立職工学校今宮分校として開設されたのはじまっている。そしてこの府立職工学校は、日露戦争後躍進する大阪工業界の要請する実務技術者を養成する工業学校とし、時の牧野伸頭文部大臣が大阪府知事高崎親章に命

#### 府立職工学校

じ、明治四一年四月大阪市北区西野田の地に開校せしめたもので、機械・造家・電機の三科が設置された。そしてその創立後七年いよいよこの種学校の拡張増設の必要が世間に認められ、前記の通り大正三年四月一日まず分校として設けられ、造家・印刷・電機・鑄工・仕上の五課程を置いた。当時の入学資格は尋常小学校卒業程度、修業年限三年であった。

#### 今宮職工学校

そして大正五年四月一日府立今宮職工学校として独立し、七年四月には現在の定時制の前身である夜間部（機械・電機・建築の三科で発足）も設けられ、翌八年三月には木型・鍛工の新工場も落成し校舎設備はいよいよ充実されることとなった。また大正一四年三月精密機械科を設置したが、一五年三月不幸機械工場より出火、電機・印刷両工場に延焼三工場が全焼した。かくて昭和二年四月には仕上・電機・印刷の各科実習工場（鉄筋コンクリート造三階建）を竣工せしめ設備を一新した。その後一三年四月夜間部を廃止し、府立今宮第二職工学校と改名したが、一五年九月一日の学制改革で校名を府立今宮工業学校（昼間五年制）、同じく第二工業学校（夜間四年制）と改めた。

戦争中勤労報国協力令による勤労奉仕、あるいは機械三、四年生の藤永田造船所への全員動員等正常授業を欠いたが、二〇年三月空襲では焼夷弾三六〇余個をうけ木造校舎のすべてを焼夷、二一年漸くバラック校舎八教室を建設、大國小学校の一部四室を借用した。そして二二年六月七日天皇陛下の行幸を仰いだ、翌二三年四月学制改革によって、校名を府立今宮工業高等学校（全日制、定時制）と改め戦後の教育のスタートを切ることとなった。かくて二五年三月新館第一校舎、二六年三月新館

#### 陛下の行幸

第二校舎、二八年南新館（鉄筋三階建）、三〇年一月新本館（鉄筋三階建）、三三年体育館、三七年第四校舎（鉄筋三階建）とつぎつぎ完成、堂々の校舎設備を誇るまでに充実されるに至った。

敷地 二四、六四三平方メートル 建物 延一三、〇一四平方メートル  
（本館ほか二八棟）

設置課程 全日制（修業年限三年）機械科、電気科、建築科、印刷工業科  
定時制（修業年限四年）機械科、電気科、建築科

なお本校の教育方針は、実力と伸展力を兼備した有能な工業技術者を養成するを目標としているが、すでに卒業生としては、各科から五名の博士号保有者も出し、特にまた建築科は、寺田済美館をはじめ墨江校など公共建築物の実績を誇り、電機科より電動機、変圧器の優秀品の製作品を出す等、工業界に貢献すること大である。

#### 四 幼稚園と各種学校

##### 公立幼稚園

当区における市立幼稚園としてはつぎの二園である。

園名	所在地	創立年月日	主 なる 沿革
玉 出	姫松通二の一七	昭和三年四月一〇日	当初玉出尋常小学校講堂を仮園舎として保育開始 二〇年三月 戦災をうけ園舎全焼休園となる 二一年四月 再開園、玉出校内六教室使用 二二年八月 姫松通二の一七に園地移転 二三年一〇月 第四期工事完成 二四年五月 現在在籍数二四七

天下茶屋	聖天下一の三二	昭和二六年四月五日	当初天下茶屋小学校内で玉出幼稚園分園として開園 二七年二月 新園舎完成し移転 二七年四月 市立天下茶屋幼稚園と改称 二二年五月 現在在籍数 三〇六
津 守	津守町東五の一 二一	昭和二三年一月六日	当初旧津守小学校地内に玉出幼稚園分園として開園 二四年三月 津守小学校併設園となり津守幼稚園と称す 三三年三月 現在地に新園舎落成移転 四二年五月 一―在籍数 二〇四

##### 私立幼稚園

このほか私立幼稚園として財団法人鶴見橋幼稚園（昭和二三年九月一八日開設）、岸の里幼稚園（昭和二八年八月一〇日開設）などがある。  
また、各種学校としてつぎのものがある。

##### 各種学校

名 称	所在地	沿 革	そ の 他
学校法人 金剛学園	梅南通五の五	昭和二三年 二五年 二九年 三五年 四三年五月	現位置に校舎落成 財団法人金剛学園を学校法人金剛学園と改称し日本政府の認可をうく（初等部） 中等部併設 高等学校併設 現在在籍数小学校 一八〇名
学校法人 天下茶屋学園	南吉田町二一	昭和二三年 二五年 二六年 三〇年 三四年	財団法人天下茶屋洋裁女学校開設 現在地に新校舎建築移転 学校法人組織に変更 天下茶屋ドレスメーカー女学院と校名改称 鉄筋三階建校舎建設

準学校法人研修学院 大学予備校	柳通一の四四	二七年 二九年 三〇年	大学予備校（個人塾）として開講 研修学院大学予備校として大阪府認可 準学校法人研修学院の認可を受け大学予備校設置
近畿美容専門学校	甲岸町二〇	二九年 三〇年 三〇年 三六年	近畿美容専門学校として開校 財団法人の設立認可 近畿美容・美容専門学校と名称変更
東洋珠算専門学校	田端通四の五	二六年 二九年	私塾東洋経理学院として創設 大阪府認可を受け東洋珠算専門学校と改称
花園珠算学校	旭南通四の一三	二三年 二九年	私塾大阪速算普及会創設 学校教育法八三条により花園珠算学校を認可をうける

# 第七章 社会福祉と医療機関

## 一 戦前の社会施設

戦前の市社会施設

当区は区内所々に戦災をうけたため、戦前豊かに有していた社会福祉施設はその殆んどを焼失するに至った。いま昭和一六年当時の主な区内の市施設をあげるとつぎの通りである。

市 設	名 称	所 在 地	実 施 事 項	設 置 年 月
	玉出住宅	千本通六丁目	住宅保護	大正九・一二
	今宮住宅	東入船町	同	昭和四・二
	今宮保護所	東田町	宿	昭和四・二 七・一（本館） 七・一（分館）
	西成弘潤寮	桜通八丁目	居室供給	昭和八・五
	今宮質舗	花園町	庶民金融	大正一四・九
	西成託児所	桜通八丁目	幼児保育	昭和八・三
	西今宮託児所	南開五丁目	同	昭和一一・六